# 金剛峯寺遺跡発掘調査概報

―紀陽銀行高野山支店新築工事に伴う発掘調査―

１９９１．３

財団法人 和歌山県文化財センター

# 例　　言

1．本書は株式会社紀陽銀行高野山支店新築工事に伴う金剛峯寺遺跡の発掘調査概報である。

2．発掘調査は株式会社紀陽銀行の委託を受け、和歌山県教育委員会の指導のもとに、財団法人和歌山県文化財センターが実施した。

3．調査面積は約170m²で、現場の発掘作業は平成２年11月26日に着手し、平成3年１月23日に終了した。

4．発掘調査は文化財センター主査上田秀夫が担当した。また、本書の作成、編集は上田が当ったが、遺物写真の撮影は同技師黒石哲夫によるものである。

5．本書における遺物実測図及び遺物写真に付した番号はすべて共通する。

# 目　次


1．位置と環境……1

2．遺　構……2

3．遺　物……8

4．まとめ……12


# 図・図版目次


図1　遺跡の位置……1

図2　調査区周辺……2

図3　古絵図に見る調査区周辺……3

図4　遺構実測図1……4

図5　遺構実測図2……6

図6　遺構実測図3……7

図7　遺物実測図1……13

図8　遺物実測図2……14

図版1　遺構写真1……15

図版2　遺構写真2……16

図版3　遺構写真3……17

図版4　遺物写真1……18

図版5　遺物写真2……19

# 1．位置と環境

高野山は紀伊山地の北西内陸部に位置し(図１)、標高1,000m前後の山々に囲まれた山上盆地で、東西約５kmの平地と、南北に延びるいくつかの谷で形成されている。

弘仁２年（816)、空海がこの地に金剛峯寺を開基して以来、幾多の盛衰を繰り返しながら今日に至り、あまたの子院を従えた真言宗総本山として独自の立場を保っている。

**図１　遺跡の位置**

この高野山は比較的古くから、主として経塚などの宗教遺跡を対象とした考古学的調査が行われ、平安時代から鎌倉時代を中心とする豊富な宗教遺物が出土している。しかし、一般の塔頭寺院が考古学的調査の対象とされるようになったのは昭和56年度の教化研修道場建設に伴う発掘調査以後のことであり、全国的な歴史考古学のブームに呼応するように、その後大規模な発掘調査が続き、新たな考古学の対象として着実に成果をあげつつある。また、歴史考古学の対象とされる大規模な遺跡が、概して遺跡の存続年代が短く、特に中世と近世の間のブランクが目立つなか、平安時代から近世まで連綿と続く非常に貴重な遺跡と言うことができる。

発掘調査は紀陽銀行高野山支店新築工事に伴うものである。調査地点は金剛峯寺伽藍の南東約200mに位置し、高野山のメインストリートである小田原通り(国史跡高野山町石道筋)に面している(図２)。 調査区は東西約７ｍ、南北約24ｍの狭小な範囲であるが、古絵図によると、調査区周辺には少なくとも３時期の文化面があると考えられ、真徳院、釋迦院(正保三年－1646)、櫻樹院、惣眼院(宝永三年－1706)、圓増院、真城院(寛政三年－1796)などの塔頭名が見られる(図３)。しかし、確実に塔頭が存在したはずの中世以前の状況や、漠然と18世紀末頃と考えられている小田原通りの町屋への転換、その後の変遷などについての資料は非常に乏しい。なお、今回の調査区付近の過去の発掘調査には、西南約150ｍに位置する高野山大学校舎建築に伴う発掘調査（昭和59年度)、小田原通りをはさんで北西約100ｍに位置する南都銀行新築工事に伴う発掘調査(平成元年度)などがある。前者においては、中世から近世にいたる塔頭寺院や近代初頭の廓跡など、後者においては、中世から近世にいたる塔頭跡や、現在、中近世考古学における最大の空白期とされる近世初頭頃の肥前系染付と共伴する中国製染付などが多量に出土している。

# 2．遺　構

東西に走る小田原通りに面して南北に細長い、間口が狭く、奥行が深い調査区で、この区画がかつての塔頭や町屋などの区画をそのまま踏襲しているとは考え難い。旧地形は小田原通りの北を東流する通称ぼど川に向かってかなりの急角度で尾根が下降し、これを水平にカットして平坦地を削り出したようで、調査区南端Ａ・Ｂ－６Ｇライン（図４）付近で岩盤カット面を検出し、以南は後述する近代整地土直下が岩盤である。

調査地区の遺構には２層の検出面が認められるが、遺構の時期は大きくは３期に分けられ、細かくは５時期に分類できる。

上層の遺構（図４、図５、図版１、図版２）は近代整地土下に検出され、幕末～明治初頭（上層Ⅰ期）のものと明治～旧紀陽銀行が建設される大正後半（上層Ⅱ期）のものが認められる。この時期の遺構のまとまりは少なく、この地区が町屋に転換した後のものであることに問題はない。

上層Ⅱ期の遺構には木組桝１、井戸１、埋桶２、溝１などがある。木組桝１は東西約2.3ｍ、南北約1.2ｍ、深さ約0.8ｍの長方形の大きな桝である。幅厚の横板を角釘で組み、内側面に幅20～30cmの縦板を釘止めし、底部は露岩のままである。溜桝と思われ、竹樋を埋めた溝６が南から流れ込む構造になっている。井戸１は直径約80cmの桶を使用したものである。掘方には直径２

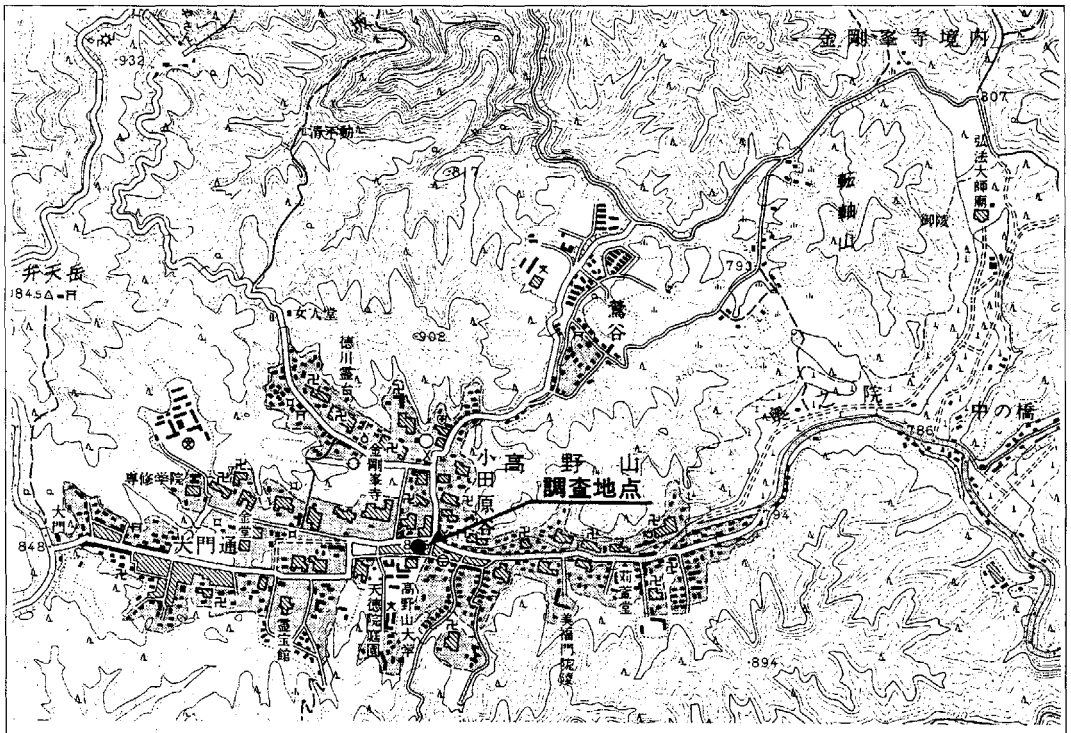


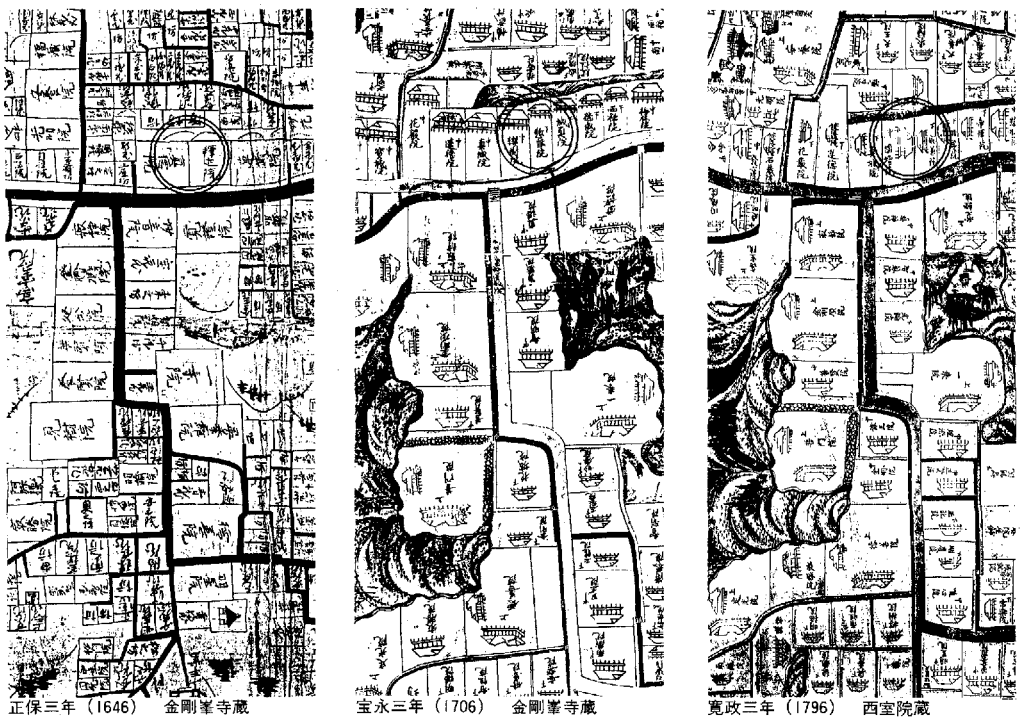

図２　調査区周辺

～３cm大の玉砂利を埋めているが、上部約20cmは赤褐色の粘土を充塡している。埋桶２は集水桝と思われるものである。底を抜いた直径約80cm、深さ30～40cmの木桶を岩盤上に据えたものである。この集水桝は、やはり竹製導水管を埋設した溝１に排水される。

上層Ｉ期の遺構には集水桝と思われる埋桶３や溝３～５、土坑１・２・４・５・10、少数の柱穴などが検出されている。埋桶３は直径約50cm、深さ20～30cmの底を抜いた桶を岩盤上に敷いた約５cmの厚さの粘土の上に据え付けたものである。桶の上部が欠損しているが、底から約20cm程のところに径７～８cmの円孔を穿ち、これに竹製導水管の端部を通して溝５に排水している。溝７から集水されていることから、会所のような機能が考えられる。

下面の遺構は第１層除去後に検出され、中層、下層の２時期がある。中層、下層遺構の間には調査区北端において部分的な第２層～第４層の堆積が認められるが、基本的には同一面で検出される。しかし、両者の時期差は大きく、中層遺構は18世紀末～19世紀初頭頃、下層遺構は15世紀頃のものと思われる。なお、遺物には遺構の認められない16世紀の中国製白磁、染付なども出土しているが、中層遺構が16世紀代の遺構の大幅な削平整地を伴っているものと考えるべきか、あるいは16世紀代の遺構は存在しなかったと考えるべきか、遺構の状況からは判然としない。

中層遺構（図４、図５、図版１、図版２）として認識できるものはほとんどが土坑で、この期の遺構も塔頭寺院のそれと考えるより、むしろ、町屋への転換後の遺構の可能性が大きい。ＳＫ02

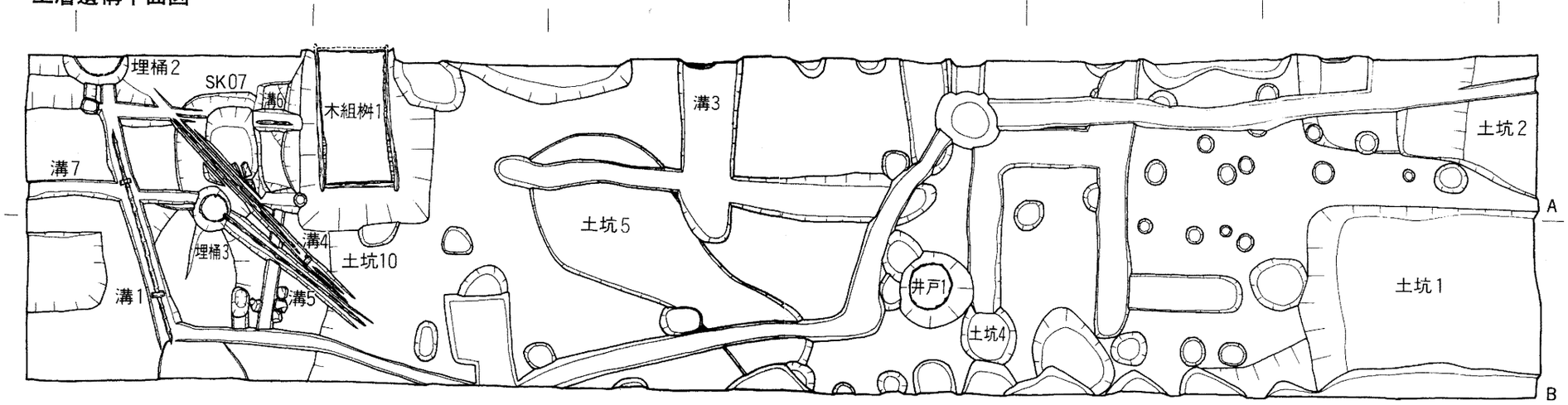


正保三年（1646）　金剛峯寺蔵　　宝永三年（1706）　金剛峯寺蔵　　寛政三年（1796）　西室院蔵

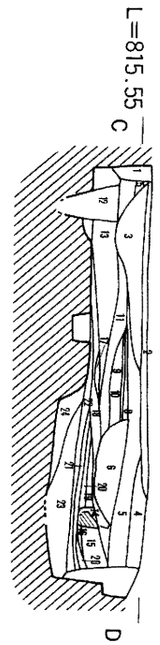
**図３　古絵図に見る調査区周辺（日野西真定編著「高野山古絵図集成」による）**

図４　遺構実測図１

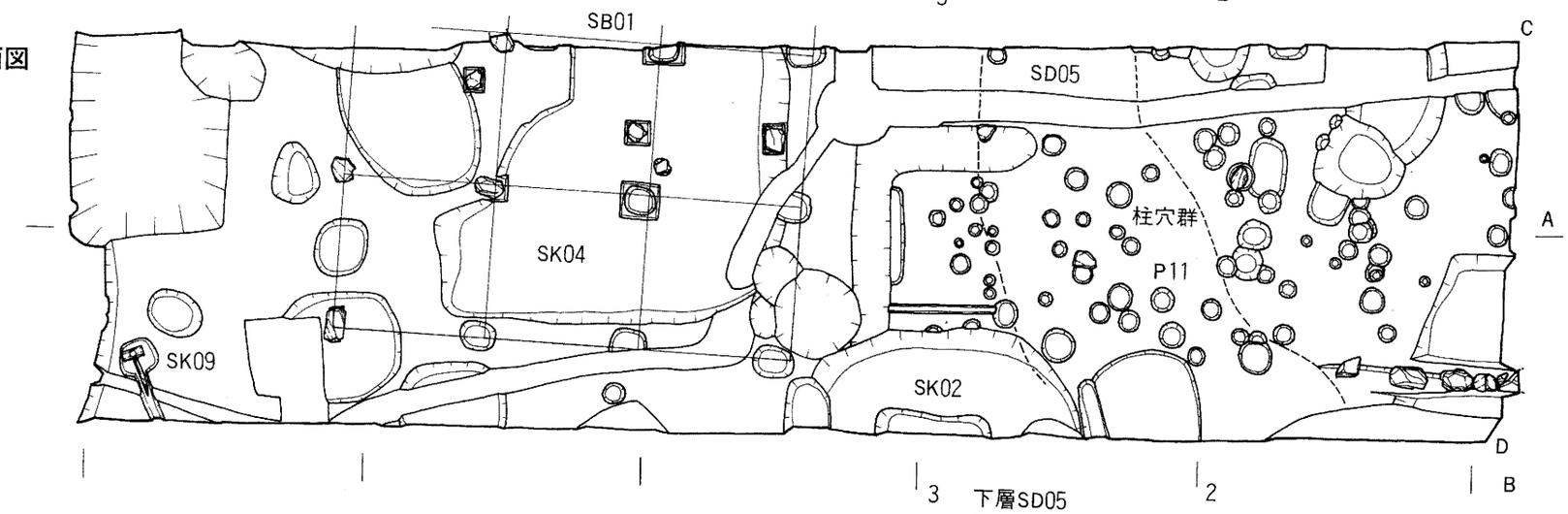
上層遺構平面図




北壁土層図

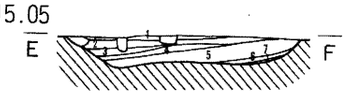



中層・下層遺構平面図

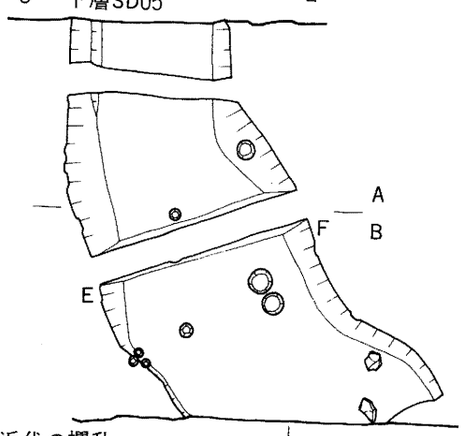



SD05土層図

L=815.05




下層SD05




1 焼土混入黄茶褐色土
2 焼土混入灰黄褐色土
3 焼土混入茶褐色土
4 焼土混入暗茶褐色土
5 岩盤片混入黄茶褐色土
6 焼土混入暗赤褐色土
7 暗灰色砂層
註：土層番号の無いものは遺構

1 近代攪乱砂
2 暗灰色砂
3 暗灰色砂礫層
4 黄灰褐色土
5 炭混入暗茶褐色土
6 炭混入灰茶褐色土
7 炭混入茶褐色土
8 灰含暗灰色粘質土
9 赤褐色焼土
10 炭・焼土混入暗灰色土
11 炭混入明茶褐色土
12 明黄灰色土
13 炭・焼土混入灰褐色土
14 黄灰色土
15 岩盤礫片混入黄茶褐色土
16 黄灰色砂層
17 黄白色砂層
18 炭混入灰褐色土
19 岩盤片混入灰褐色土
20 灰褐色炭層
21 炭混入灰茶褐色土
22 暗灰色炭層
23 明黄灰色粘土
24 黄白色砂質土
25 暗褐色土
註：土層番号の無いものは遺構

0　8m

註：上層遺構平面図中オチのケバの無いものは近代の攪乱

は直径４ｍ前後の大きい円形の落込みである。２段落ちの掘方で、中心部は岩盤を隅丸方形にカットして更に深く落ち込む。遺構の全容が不明であるが、井戸の可能性が強い。ＳＫ07は上層遺構溝３・４・６などに切られている。南北1.5ｍ、東西２ｍ、深さ約30cmの隅丸方形の土坑である。掘方は２段落ちで、周辺部をテラス状に平らにし、中心部を深く掘り込んでいる。また、テラス部東辺部には平らな石を数箇踏石状に敷いている。洗い場のようなものであろうか。ＳＫ

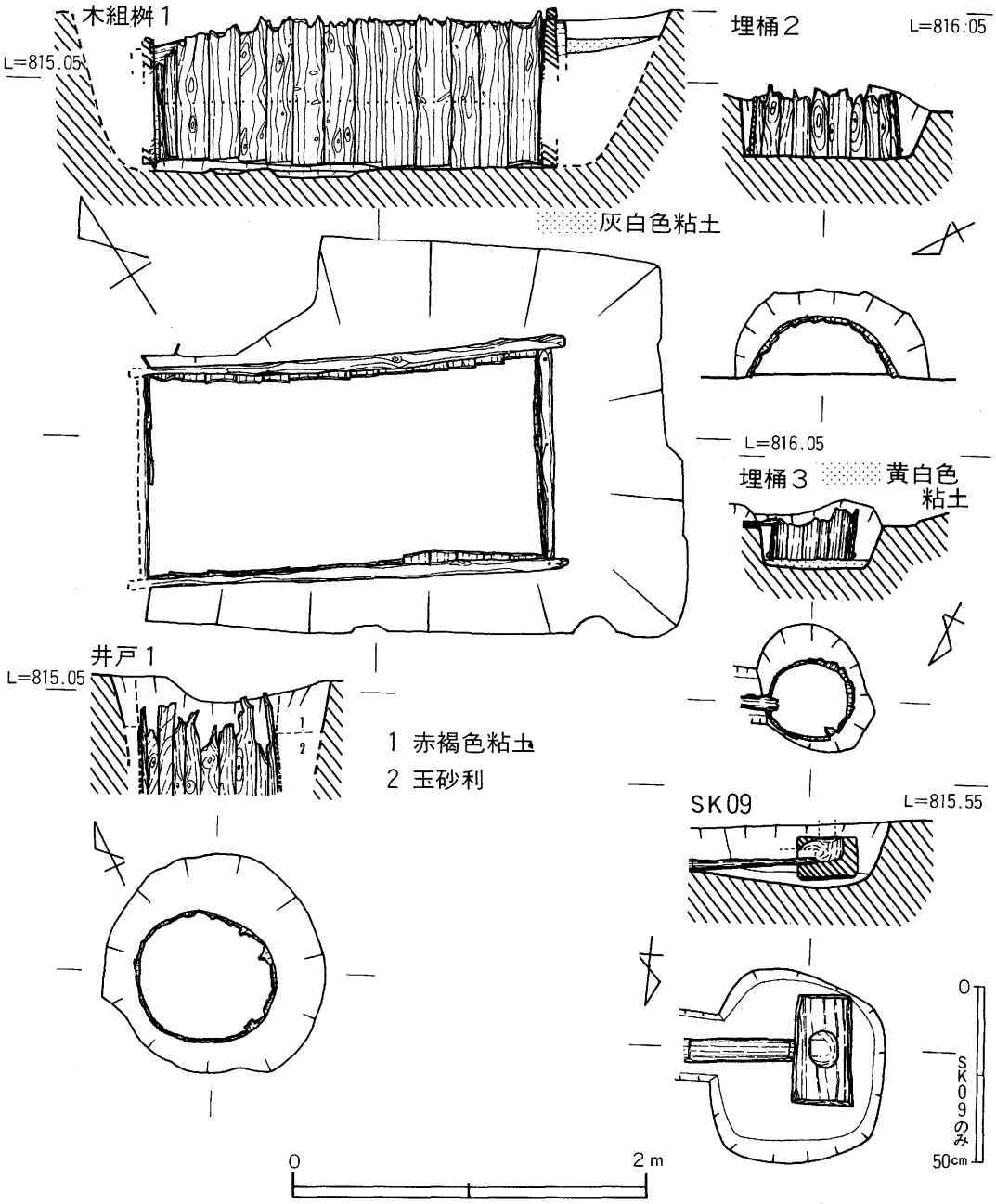



**図５　遺構実測図２**

09は竹製導水管をセットした木製ジョイント（駒）を埋設した土坑である。A・B－6Gライン付近の岩盤カット部の北に検出され、少なくとも中層遺構の時期にはこの付近が塔頭等の区画ラインであったことを物語っている。残存する排水側の導水管は水平に設置されているが、この駒はいわゆる直角エルボ型で、導水側の穴は上部から垂直に穿たれている。

下層遺構（図4、図6、図版1、図版3）には相互の切合いにより新（下層II期）、旧（下層I期）2時期の遺構が存在することが知れる。しかし、遺物が出土する遺構が少なく、切りあい以外で相互の区別をすることは難しく、時期差を明確にすることもできない。下層II期の遺構には建物SB01、調査区北端の多数の掘立柱柱穴などがある。SB01は南北3間、東西2間以上の総柱の礎石建物である。柱間が7尺（約210cm）の規模の大きい建物で、少なくとも町屋のものではなく、塔頭内の主要建物の一部と考えられる。掘立柱柱穴は調査区北端近くに集中する。調査範囲が狭いので建物を明らかにすることはできないが、塔頭内の居住空間であろうか。なお、これらの柱穴には中層遺構に伴うものも存在すると思われる。

下層I期の遺構には土坑SK04、東西に走る溝SD05などが検出されている。SK04は礎石建物SB01に切られる南北約4m、東西4m以上、深さ約20cmの不整方形の土坑である。底は非常に平坦で、叩き締めたように硬く、ほぼ全面が赤黒く焼けている。SD05は掘立柱柱穴群により切られた幅2～3m、深さ30cm前後の、やや北に彎曲しながら東西に流れる溝である。北から南に押し流したように斜めに焼土が堆積している。

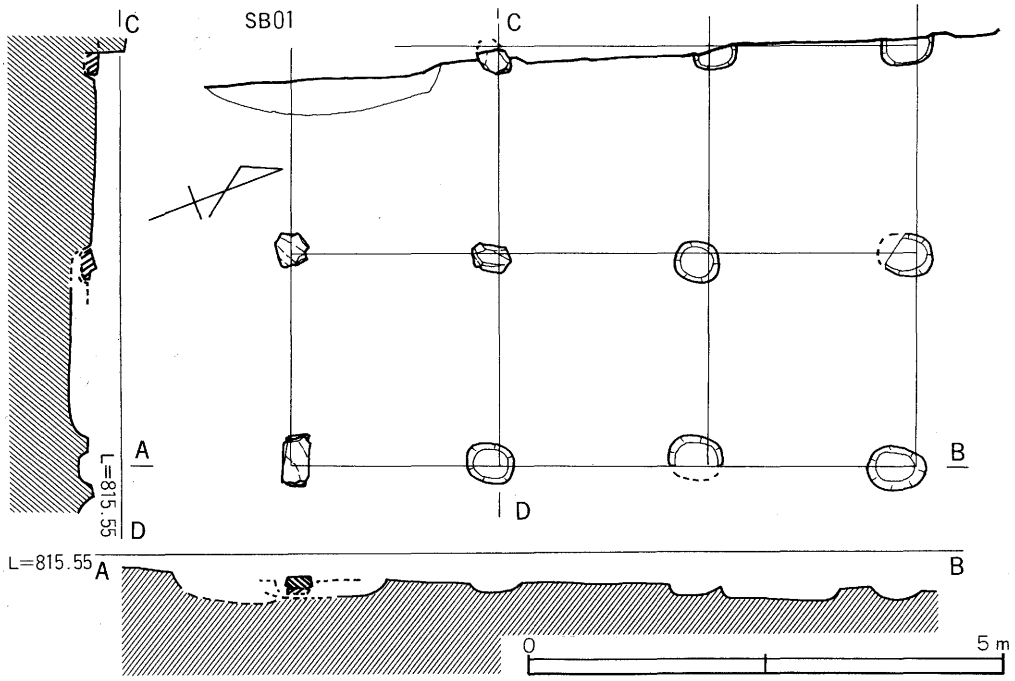



**図6　遺構実測図3**

# 3．遺　物

出土する遺物は時期的に非常に雑多で、一括性が極めて低く、調査区が相当の削平整地を受けていることを物語っている。

近代整地土は上層遺構上の整地土で、13世紀ごろから大正時代に至る時期幅の広い遺物が出土している（図７、図版４）。１～７は中国製の磁器で、青磁（１～３）、白磁（４～６）、染付（７）などがある。青磁はすべて龍泉窯系のもので、１は外面体部に片切彫の幅広の線描蓮弁文をもつ碗である。胎土はきめ細かく、灰白色を呈し、釉は透明度が高い草緑色で、気泡を多く含み、全体に粗い貫入が走る。２は無文碗である。口縁端部がわずかに外反ぎみに広がる器形である。胎土は粗く、火中して灰褐色に変質し、釉は表面がかせて失透した灰白褐色を呈す。３は口縁部を「く」の字形に折り曲げ、端部をわずかに上方につまみ上げた鉢である。内外面とも無文であるが、通常外面に型押しの蓮弁文が見られるものである。胎土はきめ細かく灰白色を呈し、釉は非常に厚く、光沢がある草緑色である。白磁は４～６共すべて端反りの器形で、通常の16世紀タイプと言われるものである。全釉で畳付の釉を内外から雑にケズリ取っている。７は口縁を「く」の字形に外方に折り曲げた小形の鉢である。体部の器肉は非常に薄く、いわゆる兜鉢に似た器形である。内外面体部に草花文が描かれている。８～22は国産陶磁器で肥前系（８～12）、関西系（13）、瀬戸窯系（14･15）、唐津窯（16）、信楽窯系（17～20）、丹波窯（21）、備前窯系（22）などがある。また、その他に瓦器（23）、土師皿（24～27）、土師質土器（28･29）、紡錘車型の不明鉛製品(30)、楔状の頁岩製の不明石製品（31）、「玄米乳」の朱書のある瑠璃色のガラス製瓶（32）、鉛ガラス製蓋（33）、ガラス製ねじ蓋（34）なども出土している。８は青磁の植木鉢と思われるものである。胎土はきめ細かく、灰味がやや強い。内面体部から畳付、内面上半部に失透した明草緑色の釉が厚くかかる。外底及び内面体部下半は無釉で、露胎部は赤褐色に発色している。外底縁周部には輪状に少量の砂の付着が認められる。９はくらわんか手の染付碗である。器肉が厚い鈍重な器形で、灰味を帯びた釉が全釉され、畳付の釉を雑にフキ取っている。外面体部に簡略化した草花文が灰青色に発色した呉須で描かれている。10は染付碗である。腰のよく張った器形で、器肉が薄い。釉はやや青みを帯びるが透明度が高く、外面体部に描かれた鶴と亀甲繋文の呉須の発色も良好である。全釉で畳付の釉を丁寧にフキ取っている。11は染付碗である。口縁部がわずかに外反する器形で、体部の器肉が薄く、非常にシャープな作りである。釉はやや青みを帯び透明度が高く、呉須の発色も良好である。染付はペンシルドローイングにより、外面体部に花弁唐草文、内面体部に雷文帯が巡る。全釉で畳付の釉を丁寧にフキ取っている。また、かなり細かく破損した様子で、非常に巧妙なガラス焼継で補修されている。12は染付の蓋である。器肉が厚く鈍重な作りである。釉はやや灰味を帯びるが呉須の発色は良好で、外面体部に孔雀文が細線と濃筆で描かれ、内面口縁

部には細線による雷文帯、内底には島影が描かれている。全釉で畳付の釉を荒くフキ取っている。13は白磁の鉢と思われるものである。内面体部には型押と思われる蓮弁文が見られ、外面体部に螺旋状の凹線を巡らし、凹線間を簾状文で埋めている。釉は青みが強く、青白磁の趣である。畳付の釉を丁寧にケズリ取っている。14・15はセットになると思われる瀬戸窯系の染付碗と蓋である。濃筆により雑に草花文が描かれている。畳付の釉のフキ取りは荒く、細かい砂粒の付着が認められる（15）。16は灰釉の碗である。口縁部がやや内彎する器形で、器肉の厚い鈍重な作りである。胎土は灰褐色で粗く、釉は透明度が高く枇杷色を呈し、全体に細かい貫入が走る。全釉で畳付の釉をフキ取るものである。17～20はとりあえず信楽窯系としたが、この種のものを焼成した窯跡が近年各地で発見され、生産地を比定するのは困難な状況にある。すべて灰釉で、碗（17）、受付灯明皿（18）、有脚受付灯明皿（19）、カンテラの類と思われる灯明具（20）などがある。21は褐釉の甕である。「T」字型の口縁を持ち、内外面に焦茶色の釉が厚くかけられている。胎土は精良で堅く、灰白色を呈す。なお、内面の施釉には刷毛塗の痕跡が見られる。22はとりあえず備前窯系とした。胎土や焼成は備前窯とほとんど区別できないが、備前産とは異なるようである。外底には焼台跡が見られ、内底にも焼台の痕跡が残る。近年備前窯を模倣した擂鉢の生産窯がいくつか確認されている。堺擂鉢が著名であるが、内底のスリ目が堺擂鉢とも異なり、現状で産地の比定は難しい。23は瓦器椀である。口縁部をわずかに外方につまみ出し、内面口縁部に沈線を巡らしている。灰白色の精良な胎土で、内外表面の燻しも充分で、黒灰色に焼成されている。内面の暗文は細く比較的密で、外面の暗文は体部分割の意識が認められる。24・25は型押しの白色系の土師皿である。26・27は粘土円板から体部を内彎気味に引き上げた在地系の小皿である。内底を不定方向にナデ、内面体部から内外口縁部に強いヨコナデを施している。外面体部から外底には指頭痕を残したままである。28は火鉢と思われるものである。口縁部を内側に折り曲げ、上端面を水平にしている。外面口縁部下に断面三角形の粘土紐を貼り、指先でのつまみ出しにより山形の刻みを入れている。胎土は堅緻で微細な砂粒を含み、灰褐色を呈す。29は底部型押しの焙烙である。底部は非常に薄く仕上げられ、口縁部から体部は丁寧にヨコナデされている。胎土は精良で少量の雲母粒を含み、明橙褐色を呈す。外底から内外口縁部の一部に煤の付着が認められる。

第１層は上層遺構と中層遺構の間層で、17世紀後半頃から19世紀初頭に至る遺物を包含している（図８、図版５）。肥前系磁器（35）、信楽窯系陶器（36）、粘板岩製砥石（37）などが出土している。35は染付皿である。精良な胎土にやや青味を帯びた釉がかかり、呉須の発色は良好である。内底には細線と濃を用いた流水文が描かれている。全釉で畳付の釉を丁寧にフキ取っている。36は信楽窯系としたが、17～20同様に産地不明のものである。非常に薄い作りの急須と思われるものであるが、胎土はやや粗く、黄褐色を呈す。内面口縁部から外面にかけて薄く白濁釉がかけられ、細かい白点と緑黄色の釉の部分がけによる文様が見られる。

第２～４層は中層遺構と下層遺構の間層である（図８、図版５）、同時期の整地層と考えられ、ほとんど時期差は認められず、13～15世紀の遺物が混在して少量出土している。瓦器（39－第３層）、土師皿（38－第２層、40・41－第３層、43・44－第４層）、土師質土器（42－第３層）などがある。39は瓦器椀である。薄い器肉で、口縁部のヨコナデにより内端部に面を持たせている。黄灰白色の精良な胎土で、器表の燻しも充分である。内面の暗文は密で細いが、外面の暗文は太く粗い。38・41は同タイプの中皿と小皿で、在地系のものと思われる。共に口縁から内面体部に煤の付着が見られる。灰黄褐色のやや粗い胎土を持ち、内底を不定方向にナデ、内外体部に比較的丁寧なヨコナデを施している。外底は指頭痕を軽くナデ消している。40・43はほとんど同一タイプの褐色系の中皿である。精良な灰黄色の胎土を持つ。肥厚した体部を口縁端部で尖らせている。外面体部以下に指頭痕を残す。44は一見瓦器皿と思えるものであるが、胎土は粗く、灰茶褐色を呈す。口縁部の強いヨコナデにより、外面体部との境に稜をなしている。42は土師質の羽釜である。胎土は砂粒を多く含んで粗く、黄橙褐色を呈す。

遺構から出土した遺物は概して少量であるが（図８、図版５）、上層Ⅱ期の木組桝１からは大量の遺物が出土している。肥前系磁器（45）、産地不明の磁器（46～47）、唐津窯（48）、信楽窯系（49～52）、丹波窯（53）などの陶器、土師質土器（54）、漆塗椀（55）などがある。45は染付皿である。丁寧な作りで、釉は透明度が高く、呉須の発色も鮮やかである。外面体部に細線による唐草文を巡らし、内面口縁部には細かい雷文帯を回している。内底端に偏して丸文に丁寧な違鷹羽文が描かれている。46は白磁の盃である。外面体部には意識的に装飾とした巻上痕状の段を付け、口縁はわずかに外反する。薄い作りの対部に比して、削り出した底部は厚く、安定感がある。胎土はやや灰味を帯びるが精良で、釉は光沢がある。畳付から外底を露胎で残す。47はクロームによると思われる緑の螺旋状文と鉄による焦茶色の斑点で内面を装飾した碗である。口縁端部を玉縁状に折り曲げている。高台は椎茸高台風の浅い抉りで、畳付の釉を雑にフキ取っている。48は唐津窯の京焼写しの碗である。やや粗い灰白色の胎土に透明度の高い灰緑色の灰釉がかかり、外底高台付近以下を露胎で残す。内底には赤褐色、薄緑、灰青色を使い分けた笹文が見られる。49～52も17～20と同様のものである。49は鶴首と思われる壺である。蕪状に張った体部には鉄により草花文が描かれている。灰黄色の灰釉には微細な貫入が走り、体部下端以下を露胎で残している。50は大形の土瓶などの蓋と思われるものである。外面に灰釉と鉄釉が二重がけされている。51も蓋状のものであるが、つまみが無く、器種不明である。外面のみ灰緑色の灰釉がかけられている。内面には径約１cm、外面には径約0.3cmの、それぞれ４ヵ所の目跡が見られる。52は灰釉の鍋である。51同様灰緑色の釉が蓋受端部を露胎で残してかけられている。53は丹波窯と思われる玉縁状口縁の壺である。暗灰色の堅緻な胎土であるが、火中して自然釉がケロイド状に焼けただれている。54は29同様の焙烙である。55は小さく低い高台を持つ浅い椀である。漆膜が薄く、雑な作りで、内外

面体部の一部に黒漆が残存するにすぎない。

上層Ⅰ期の遺構からは、56（土坑１）、57（土坑２）、58（土坑５）、59（土坑10）、60・61（溝３）、62～65（溝４）、66（溝５）などの遺物が出土している。56は口縁部を水平に外に折り曲げた信楽窯系の蓋物の鉢と思われるものである。灰白色の堅緻な胎土で、内面口縁直下から下部に光沢のある黄灰緑色の釉がかかる。外面は露胎で、体部上半を鉄で化粧し、下半には鉋状の施文具により放射状の刻み目を入れている。57～58は肥前系の磁器である。57は口縁の内彎する器形の染付碗である。外面体部には淡い呉須の濃による草花文が描かれ、内面口縁部には四方襷文が巡る。58は赤絵の盃である。比較的精良な胎土にやや灰味のある釉がかけられ、外面体部に上絵付で窓を空け、窓内に草花文を描き、空間を斜格子で埋めている。59は染付の皿で、高台がバチ状に外に広がる器形である。火中して釉、呉須がカセているが、外面体部に花弁文と角福銘を交互に巡らせ、内底にも角福銘が見られる。蓋の可能性が強い。60は朝鮮製の褐釉瓶の口縁部と思われるものである。暗紫色の精良な胎土に光沢のある暗緑褐色の釉がかかる。船徳利型の器形と思われる。61は産地不明の鉢である。胎土は非常に精良で、かすかに赤みを帯びた灰褐色を呈す。外面にはガラス質で非常に透明度が高い青磁釉がかかり、内面には呉須で花弁唐草文が描かれている。62は肥前系の染付の蓋である。高台がバチ状に外反する器形で、外面体部には濃筆による剣頭文、内底には細線と濃筆による松竹梅文が描かれている。63は肥前系の染付碗である。胎土の灰味が強く、呉須は灰褐色に発色している。外面体部に草花文、内面口縁部に便化した波濤文が巡っている。64は産地不明の三足盤である。灰白色の堅緻な胎土で、外面体部下半を露胎で残して赤褐色の釉がかかる。露胎の体部下半には細い幅の回転ヘラケズリ痕が残る。65は信楽窯系の口縁部を内側に水平につまみ出した器形の鉢である。堅緻な灰白色の胎土に光沢のある灰褐色の釉が薄くかけられている。66は中国製の青磁碗である。小振りで浅く、口縁のやや内彎する器形である。灰色の精良な胎土に淡黄緑色の透明度の低い釉がかけられている。

中層遺構の遺物には、67～69（ＳＫ02）、70（ＳＫ07）などがある。67は肥前系の高台がややバチ状に広がる器形の染付碗である。釉は光沢があり、呉須の発色は比較的良好で、外面体部に濃筆による草花文、内底に便化した「誉」字と思われる銘が見られる。全釉で畳付の釉は雑にフキ取られ、一部に砂が付着している。68～69は18同様の信楽窯系受付灯明皿である。68の受には深く幅広の抉りが見られる。70は焼塩壺の蓋である。黄褐色の精良な胎土で、外面全体を丁寧にナデている。内底には全面に非常に細かい布目痕が残っている。

下層Ⅱ期の遺物は非常に少なく、71（Ｐ11）などの瓦器椀や土師皿の小片が少量出土するにすぎず、遺構の時期を明確にできるものはない。

下層Ⅰ期の遺物もごく少量である。瓦器や土師器の小片以外には72～75（ＳＫ04）などがわずかに認められる。72は中国製の青磁碗である。やや粗い暗灰色の胎土に、透明度が高く光沢のある

暗緑色の釉が厚くかかっている。口縁がやや外反し、腰がよく張った大振りの器形で、外面体部下半に回転ヘラケズリ痕の見られるタイプと思われる。73は60と同様のものである。74は瓦質の差込式の脚部と思われるものである。指で形を整えただけの雑な作りで、上端部が生きた面であるが、器種は不明である。75は土師質の角火鉢である。口縁部を内側に引出し、上端部を広く水平にした器形である。外面口縁部付近に二本の小さな凸帯を貼り付け、凸帯の間に花弁文のスタンプを巡らしている。内面口縁部から外面にヨコナデを施し、水平に引出した口縁上端面は軽く磨いている。内面体部には横方向のヘラケズリ痕が見られる。胎土は精良で灰黄褐色を呈し、微細な雲母粒を含んでいる。

# 4．まとめ

調査範囲が狭小で、かつ、時期差の大きい遺構が同一面で検出されている。また、かつてないほど出土遺物の量が少ないなどの条件が重なり、遺構の具体的な全体像をつかむことができなかったが、以下に今回の発掘調査によって判明した問題点などを簡単に述べたい。

まず、メインストリートとしての小田原通りに面したこの周辺がいつ頃から開発されたかという点である。調査地区の近世以前の絵図などが遺存しないためあまり明らかではないが、今回の調査区においては15世紀を遡る遺構は確認されていない。また、遺物から見ても、瓦器などの小片や一部の中国製青磁などを例外とすれば15世紀以前の遺物は皆無に近い。この点については南都銀行の発掘調査地点においても14世紀以前が沼地のような地形であったことが判明しており、高野山大学の発掘調査地点においても15世紀以前の遺構は検出されていない。これらから考えると、メインストリート沿いであり、古くから発達していたと思われる調査地点周辺の開発は15世紀以降の案外遅い段階からのものと思われる。

また、遺構の認められない16世紀代についてであるが、明確にこの時期のものと考えられる遺物は非常に少量である。近代整地土に含まれる数点の白磁と１点の染付のみで、遺構が削平されたと考えるより、むしろ、遺構が存在しなかったと考えるべきであろう。図３正保三年（1646）の古絵図に見られるような、所狭しと塔頭が立ち並ぶ大規模な開発は17世紀以降のことと思われる。

次にこの地区の町屋への転換時期である。調査範囲の関係などからあまり明確には言えないが、遺構から考えられる町屋への転換は中層遺構の時期からと思われる。中層遺構の直上層である第１層には17世紀後半から18世紀末～19世紀初頭頃の遺物が認められ、遺構からも同様な遺物が出土している。これから考えると、図３寛政三年（1796）の古絵図が小田原通りにに塔頭が立ち並ぶ最後の状況を示しているもので、18世紀末～19世紀初頭頃から次第に町屋へと転換して行ったものと考えられる。

図7　遺物実測図1

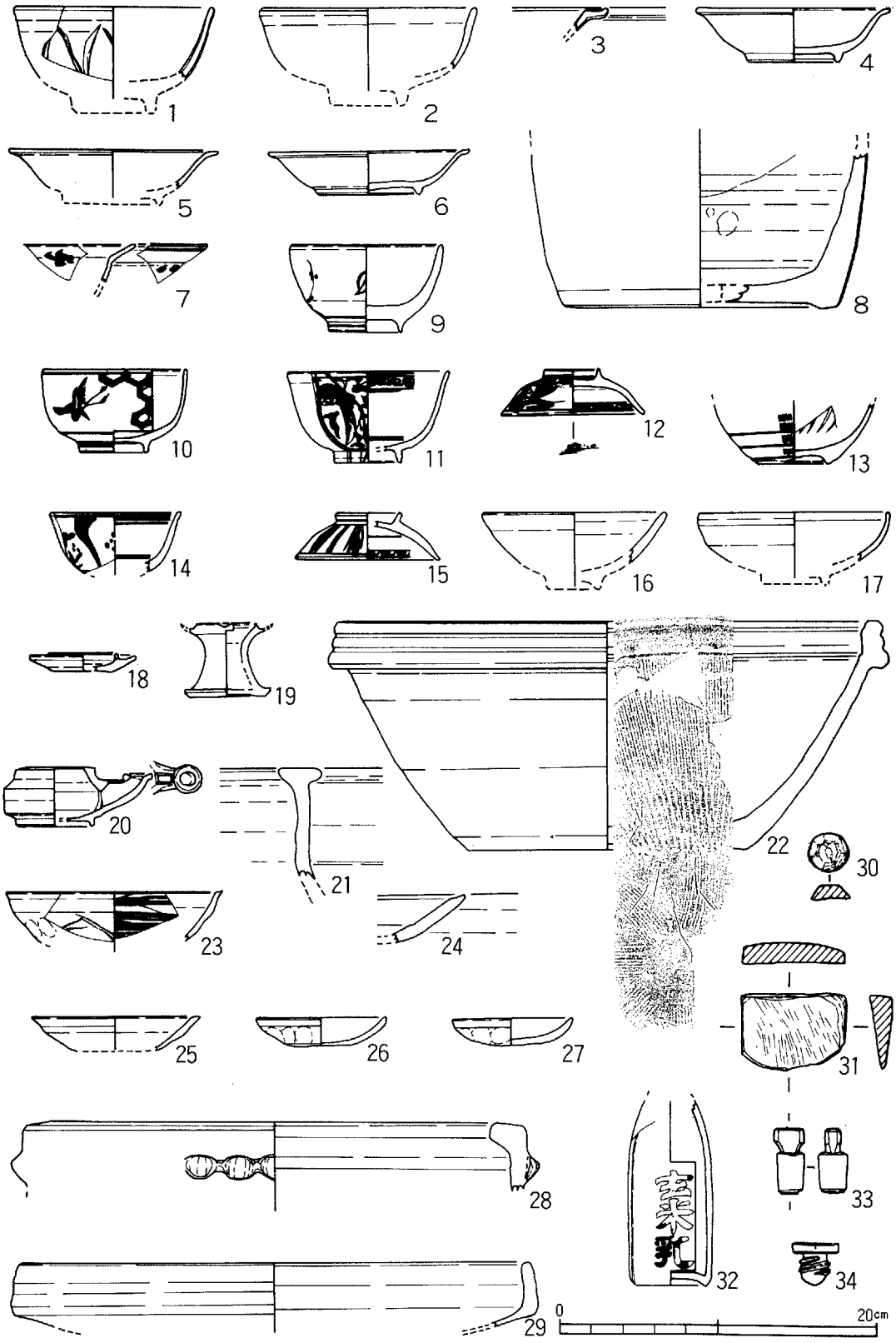
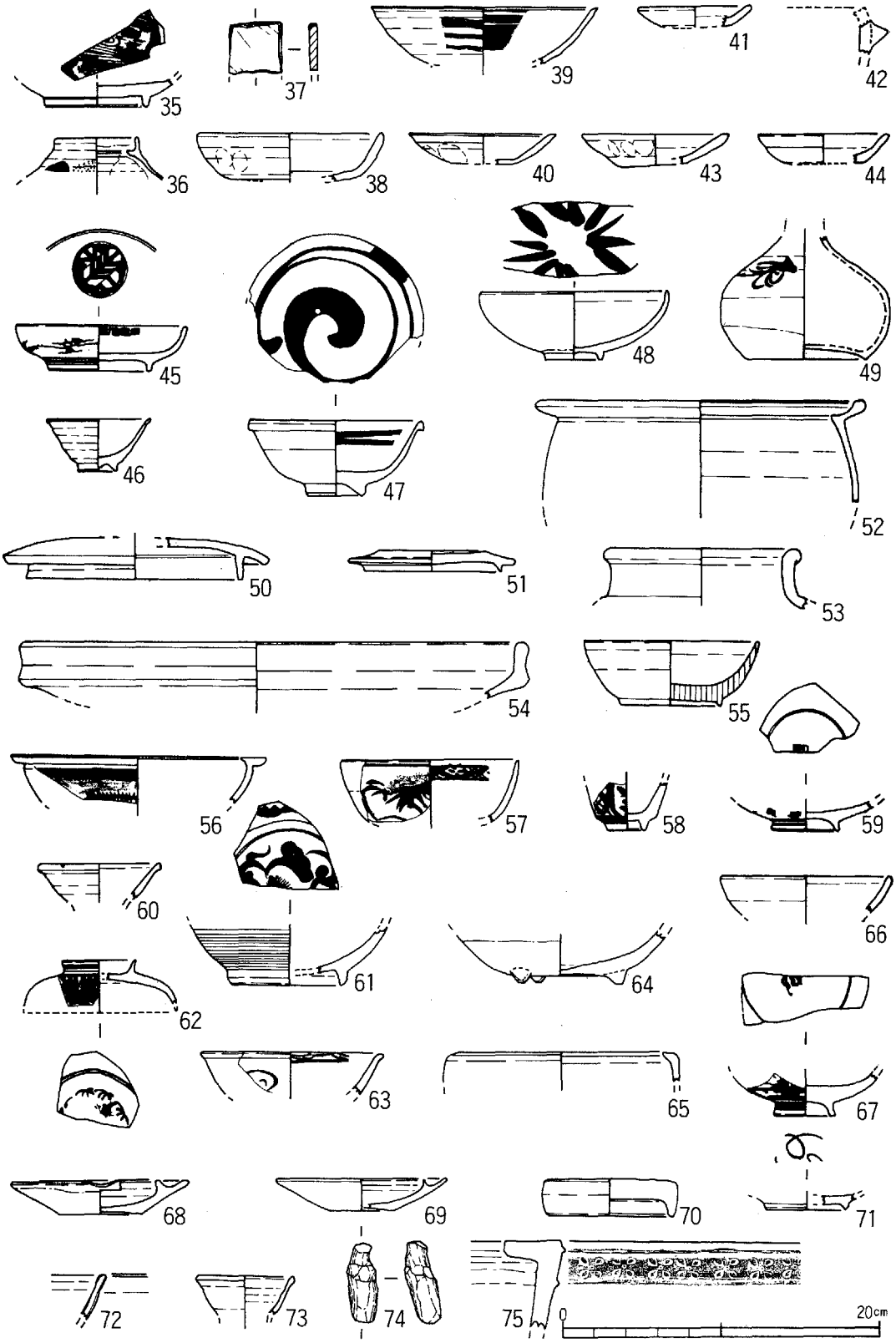

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
0
20cm

図８　遺物実測図２


35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
0
20cm

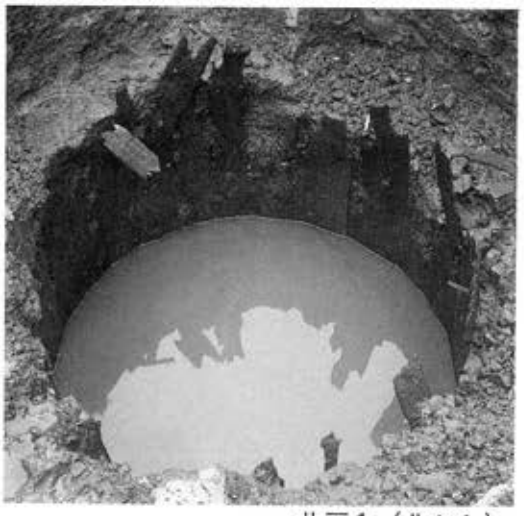
図版１　遺構写真１

上層遺構全景（北から）

中層・下層遺構全景（北から）

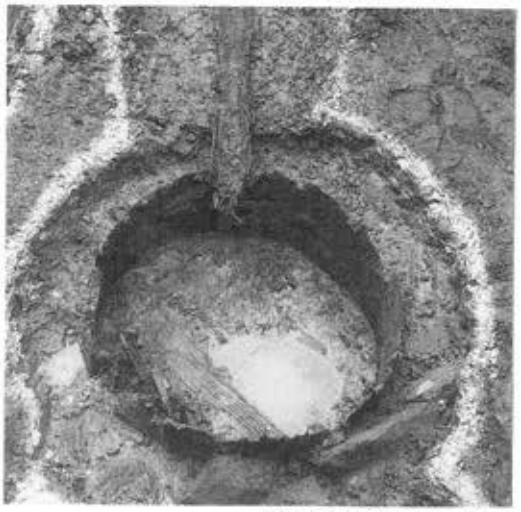
図版２　遺構写真２

溝１（東から）



井戸１（北から）

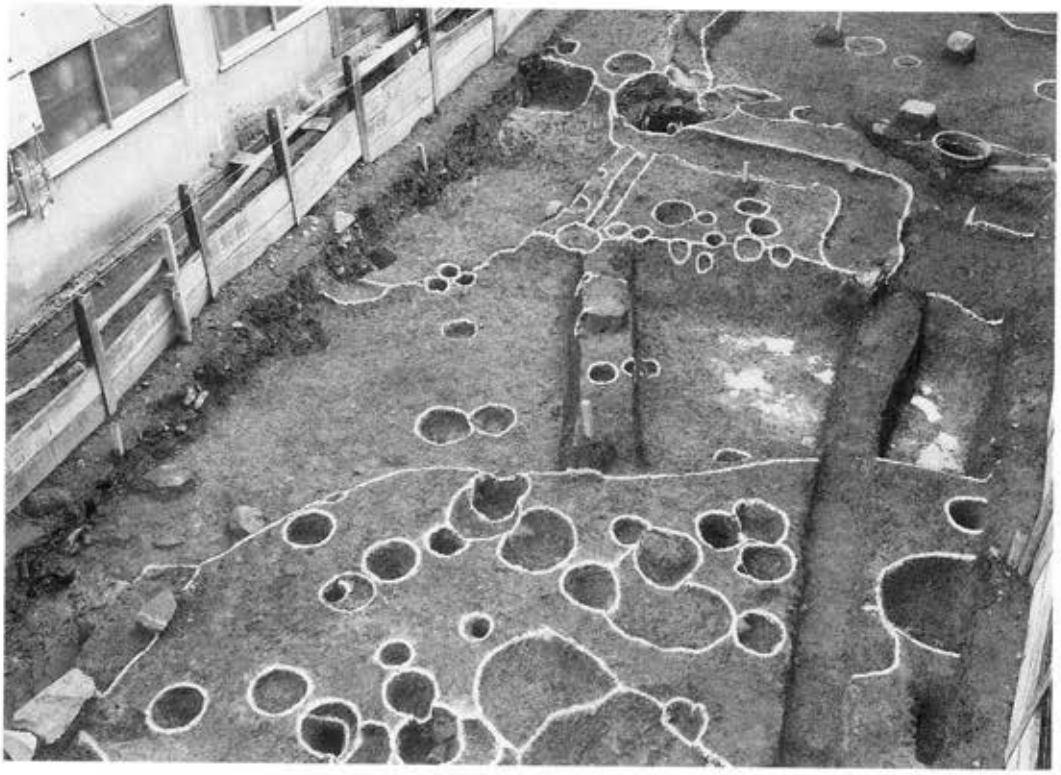
埋桶２（東から）



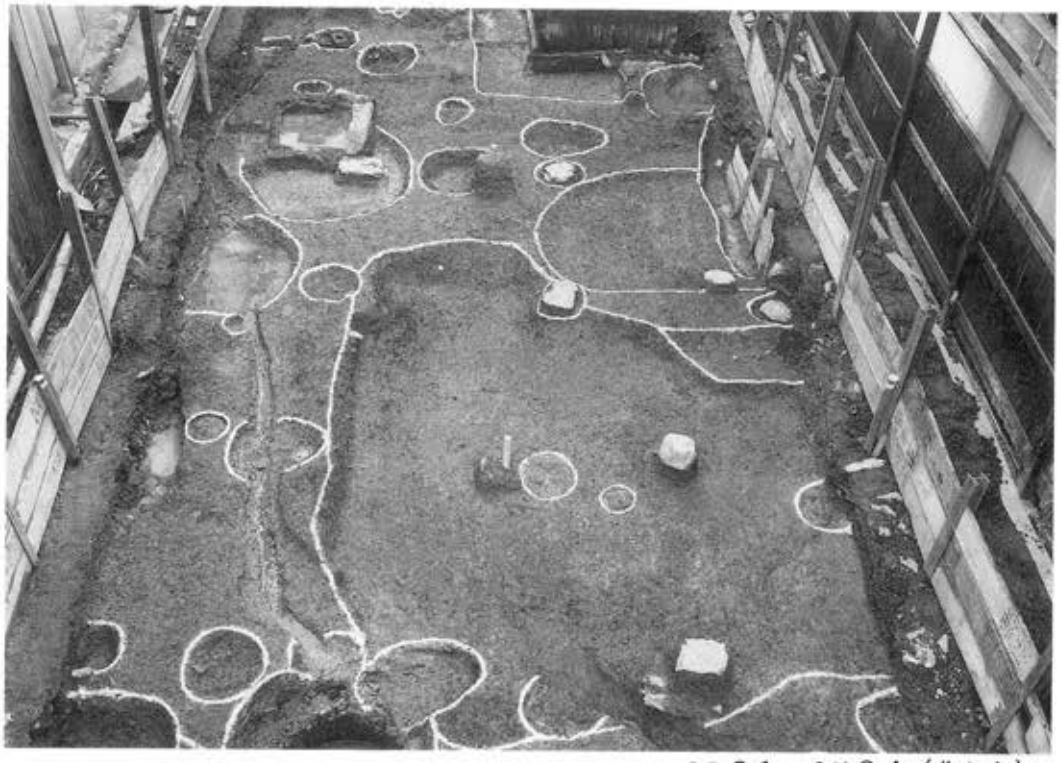
埋桶３（南西から）

木組桝１（北から）

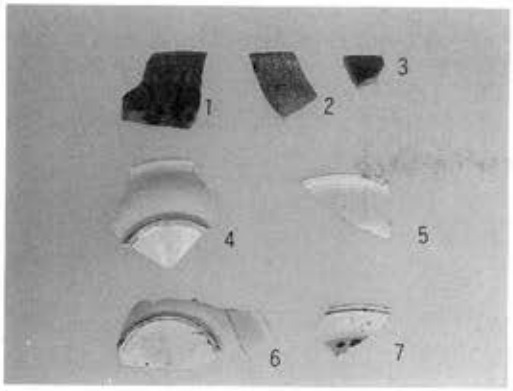
ＳＫ０９（北から）

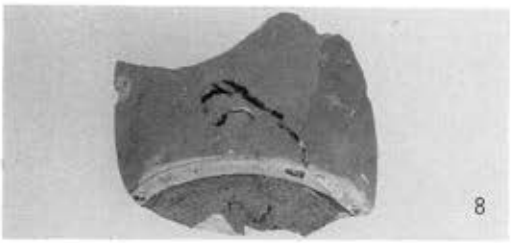


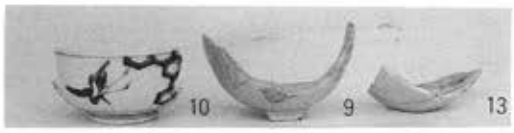
ＳＤ０５（北から）

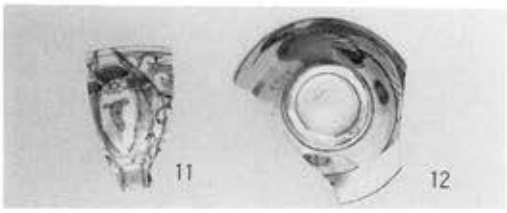


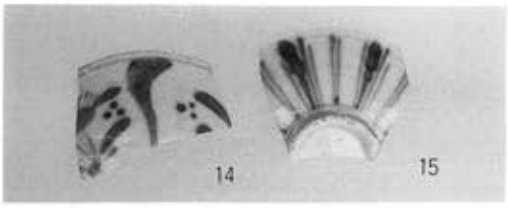
ＳＢ０１・ＳＫ０４（北から）

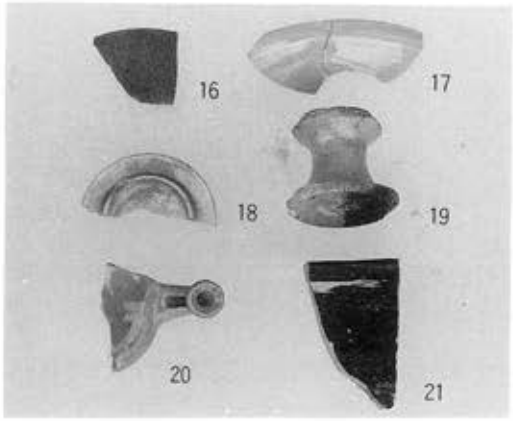

1
2
3
4
5
6
7


8

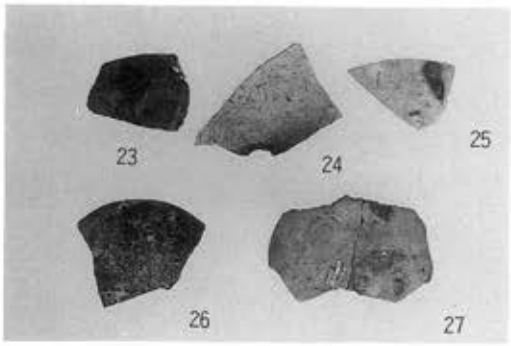

10
9
13


11
12

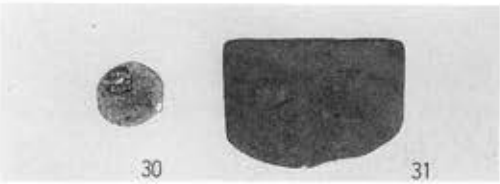

14
15

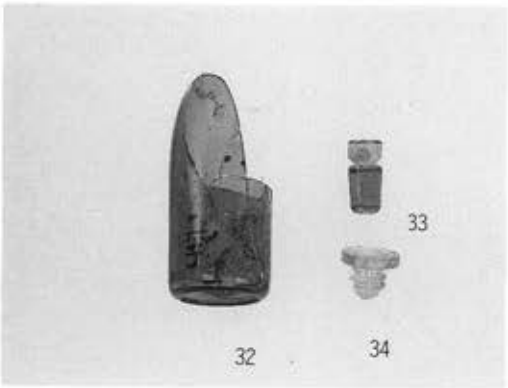

16
17
18
19
20
21

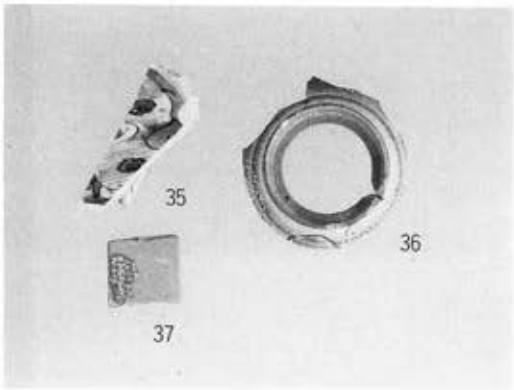
22

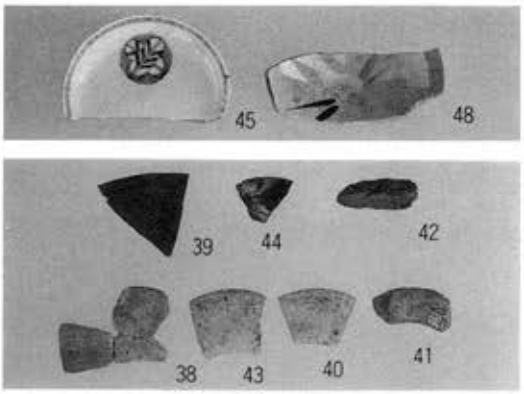

23
24
25
26
27

28
29

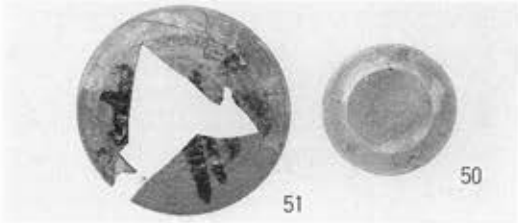

30
31

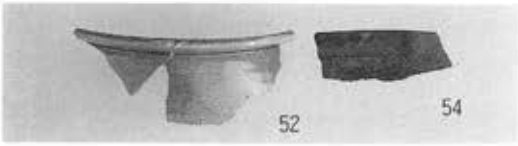

32
33
34


35
36
37

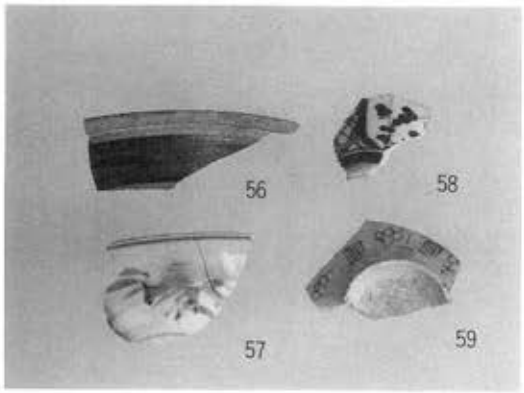

45
48
39
44
42
38
43
40
41

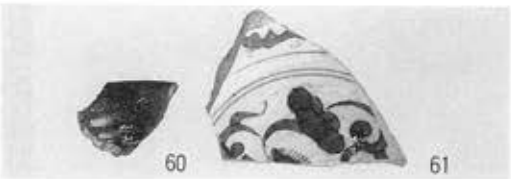
49

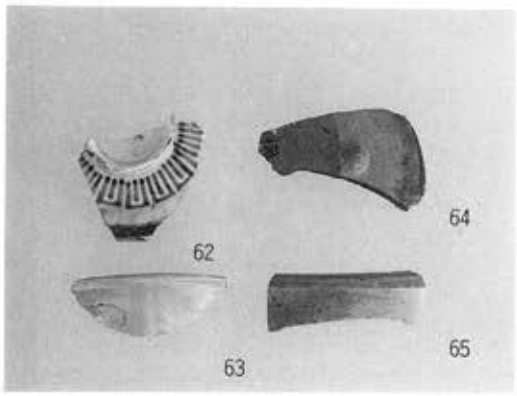

51
50

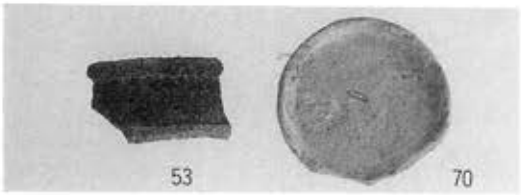

52
54

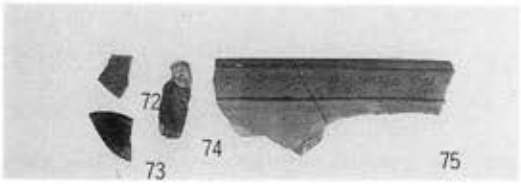
55


56
58
57
59


60
61


62
64
63
65


53
70


72
73
74
75

金剛峯寺遺跡発掘調査概報

―紀陽銀行高野山支店新築工事に伴う発掘調査―

平成３年３月

発行　財団法人　和歌山県文化財センター
〒640　和歌山市広道20番地　第２田中ビル

印刷　有限会社　土屋総合印刷
〒640　和歌山市湊北町１―12